
若草山三千桜

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若草山三千桜

【Nコード】

N3187Z

【作者名】

義雄

【あらすじ】

明日は全国的に晴天となるでしょう。ですが、奈良県では夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。また、奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地藏様を忘れないよう気を付けてください。

鹿が空を舞い、仏像型ロボットが地を走る。神も悪魔も仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。そんな、少しずれた日本の奈良県で暮らす主人公（ヒロイン系）のお話。

奈良と地蔵バッグと僕（前書き）

この物語はフィクションかつカオスで罰当たりです。神も悪魔も
仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。

奈良と地蔵バッグと僕

『続いては地域のニュースです。本日は明日香村で埴輪祭が行われました。千体もの埴輪が道いっぱいに行進する様を、地域の人たちや観光に訪れた方々が楽しそうに見られていました』

『いや、これは毎年のことながらすごいですね』

『ぴよこぴよこと跳ねて動く埴輪が可愛らしくて、お子さんたちも顔をほころばせていますよ』

テレビの中ではニュースキャスターがうつすら微笑みながら今日の出来事を読み上げている。

この時間帯はチャンネルを回しても見るものがない。

ぼんやりと画面を眺めていると、確かに埴輪のコミカルな動きは少し笑えてくる。

『午後からは奈良市内で新人警官による騎鹿隊行進きかたいがあります。普段は見せない鹿たちの雄々しい姿が見られるこれ以上ない機会なので、是非見に行かれることをおすすめします』

『鹿せんべいをねだる様子からは想像もできないほど素晴らしい動きを毎年披露してくれますけれど、今年はどんなイベントになるでしょうか』

『明日が楽しみですね。この後のお天気情報でもお知らせしますが、明日の奈良県は夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地蔵様を忘れないよう気を付けてください』

「うわ、餓鬼注意報か。地蔵バッグはっ」と

クローゼットの中をかきわけ、一番奥から石っぽい質感が頼もしい地蔵バッグが出てきた。

誕生日プレゼントとしてもらった宝印ブランドものなのに、と我ながらぞんざいな扱いに苦笑する。

頭の部分にあるファスナーを開けてひっくり返すと、仏様と鹿が合体したようなマスコットキャラのキーホルダーがころりと落ちた。かわりにレトルトのお粥と筆記用具、大峰山の美味しい水、清め塩を放り込んで明日の準備は万端。

小物入れの塩のストックも最後だった。

「明日購買行かなきゃ」

そこそこの時間になっていたのでベッドに転がり読書にいそしむことにした。

『これなら納得！ 般若心経』はもう読み終えた。『鑑真とガンジー、その共通点』もそんな気分じゃないなあ。

漫画スペースに目を移す。

最近新装版の出た『オートマタ雑技団』は泣きまくっちゃうからダメだし『九頭龍高校ホステス部』、『釈迦に届け』も違う。『教皇聖下の料理人』でもない。

思い悩んだ末にゲームの攻略本を手にとった。

明日は『ARMORED BUDDHARUPA 3 SILENT GANDHARA』をやるう。

『クシャーナ磨崖仏開発工場救援』というミッションでどうしても天道ランクがとれない、せいぜいが人間道までだ。

どうにも攻撃に専念しすぎて上から降ってくる衛星バジユラ砲に対応できない。

回避重視の軽量で行くか、重量系高火力で攻めるか、きっちり仏像構成も考えておかないと。

「スパディア（スーパーディアティール大戦）とミックスしてくれないかなあ」

百を超える色んな仏具を組み合わせて機体を造れる仏像アクションゲームと、世界各地の神様を雑多に混ぜ込んだ戦略ゲーム。

二つが合体すると、もう収集がつかないくらい楽しそうなのに。

ほどなく眠気がやってくる。

電気を落として僕は夢の世界に旅立った。

若草山三千桜

春眠暁を覚えず、とは誰の言葉だったか。

ずいぶん前に習った漢詩だったと思うけれど忘れてしまった。

まあ、何が言いたいかと言うと。

「眠い……」

風もない穏やかな日だ。

夕方から怪しくなると聞いていた空を見上げても雲一つなくて、柔らかい日差しがこれまた気持ちいい。

ブロッケン堀沿いに時折目にかかる餓鬼さえいなければとてもいい

日だったに違いない。

見かけるたび般若心経を唱えてやるのだけれど、いい加減バッグの中身も軽くなってきた。

学校に着くまでお粥と水が持つかな。

とは言えお経を唱えて地藏バッグの中にある飲食物をお供えしないと今度は僕が取り憑かれる。

朝っぱらからハラペコになるのはゴメンだし、脂肪吸引されるのもイヤだ。

池のほとり、いつもの待ち合わせ場所についてベンチに腰掛ける。満開の桜が綺麗だった。

「おはよー」

「おはよ」

日向ぼっこをしているカメになんとなく目をやっていると、同級生が近づいてきた。

「いい天気やねー、まさに行進日和って感じ」

「おじさん今年も？」

「うん、鹿せんべいを忘れるアホが毎年おるって朝からぼやいとつたわ」

彼女は若草かの子。胸元に金糸で校章を繕った紺のブレザーに身を包み、学生帽をかぶり、背中に赤い牛皮製ランドセルを背負った鹿だ。

つぶらな瞳と艶やかな毛並み、ところどころにある白い斑点がチャームポイントだとか。

いわゆる僕の幼馴染というヤツでなおかつ腐れ縁。幼稚園からの

知り合いだけでも十七になっても同じ学校に通っているだなんて、想像もしていなかった。

「あれ、手袋とブーツ新調した？」

「お、よー気づいたやん。始業式やから気分一新、今日からアグレッシブに生きるで！」

前足には明るいチェック柄のミトン、後ろ足には黒いブーツを履いていた。

おしゃれさんな彼女らしくセンスがいい。

「自分も地蔵バッグ使ってくれてるやん」

「……まあね」

昨夜まで埋もれていたとは、とてもじゃないが言えない。

「その格好つてことは今日一日は二足歩行で過ごすんだ」

「一日目やし、そんなくらい気合をいれていく！」

鹿は基本的に四足歩行なのだけれど、彼女みたいなお洒落さんは二足歩行を好むらしい。

ただ直立するのはそこそこの筋力とテクニックを必要とするみたいだ。

飲食店や土産物屋が立ち並ぶアーケード街で、ちらほら目に入ってくる他の鹿はやっぱり四本足でのんびり歩いている。

ここら辺まで来ると早朝からお坊さんか巫女さんあたりが被ったのか、餓鬼の姿は見えなかった。

背中ので蔵バッグはまだしっかり重いしこれで一安心だ。

「猿沢池の桜も満開やし、明日の入学式はばっちりやね」

「僕らにはあまり関係ないけどね」

「新入生確保せなあかんやろ」

「弓道部のスタンスは自分との闘い、無理やり新入生を引っ張ってくるのはかわいそうということだ」

「次期部長候補やん、もつとハングリー精神に溢れなあかんって」
「柳生さんがきつとやってくれるさ」

他愛もない話をしていると商店街を抜けて駅前に着く。
今日も行基像は鈍く輝いている。

「あ、青やったのに」

運悪く信号が変わったところだった。

「今年度もはじまるなあ」

「せやな、来年は受験やから青春を謳歌するなら今年しかないで」

「青春と言われてもピンとこないや。にしても来年は受験か」

「関関同立？」

「や、まだ決めてない。がんばれば神戸あたり狙えるかもしれないし」

「おー、やるやん。一人暮らしはじめたら泊めてな。三ノ宮とか中華街とかぶらついてみたいねん」

「まだ受けてないし受けようかも決めてないよ。そっちは？」

「市立か府立かなあ」

かの子が前足を額に当てて首を振った。

「あかん、春らしくない気分になってきたわ」

「もつやめとこ。明日は明日の風が吹くってね」

話が途切れたと同時に信号が変わった。
ここを渡れば学校まであと少し。

「そっぴゃ『枕』の薬師寺ライブ、チケットとった？」
「ばっちり。今から楽しみやなー」

互いが好きなバンドのライブや、他愛もない話をしているともう
学校だ。

「あら、鹿っ子とその飼い主じゃない」
「む」

校門の寸前で声をかけられた。

どれだけがんばつて染めたとしても再現できないほど綺麗な金髪
に黒のメッシュ、ついでに長いツインテール。

高い身長と釣り目で気の強そうな顔立ちの、ブレザーに身を包ん
だ見た目だけはパーフェクトな女の子だ。

「トラちゃんぐっもーにん!!」
「おはよう張子さん」

信貴山にある大きな張子の虎を知っているだろうか。

人なんかよりもよっぽど大きなそれは去年のお正月に生誕九十九
年を迎えた。

その瞬間彼女は、張子虎珀は生まれたそうだ。
ついでに変身能力まで手に入れて高校生活を楽しむためにウチに
入学したとか。

名物の巨大虎がいなくなった信貴山は新たに一回り大きなヤツを
作って「また九十九年もたせてみせる！」と息巻いているらしい。

「お、おはようございます……」

それはさておき、彼女にはどうしようもない欠点があった。自分から言う分には一切問題ないのだけれども、会話が苦手なのだ。

詰め寄られたり会議になれば頷くしかできない、まさに張子の虎の付喪神。

さっきまでの強気な態度がどこかへ消し飛んでしまったように、顔を染めて恥ずかしげに俯いている。

「トラちゃんその性格なおさな……」

「わかってるんですけど……」

そんな性格を知ってか無理やりにも彼女にアタックする輩は一時すごく増えた。

その窮地を救ったのが我が幼馴染、かの子だ。

自慢のおみ足で群がる野郎どもを文字通り蹴散らしす様は映画のヒーローみたいだった。

それ以来かの子は張子さんにすごく懐かれている。

「そついや同じクラスになれるかなー」

「……なれるといいですね」

「二年連続は難しそうかな」

どんな一年になるのか、少し楽しみだった。

自宅と柳生さんと僕

「今日はここまで。餓鬼注意報も出てるし気をつけて帰るように」

始業式は何事もなく、ホームルームもたった今終わり。

赤い舌をしゅるしゅるさせながら僕らの新しい担任、三輪蛇夫先みわのだゆう生は教室をずりずりと出て行った。

「いやー結局同じクラスやったね」

「うん、それに担任の先生もアタリだった」

「三輪の名字を与えられてるなんて、すごい方ですわね」

「三輪先生、結構な名家生まれらしいよ」

「かー！ 神社名字は違うねっ」

「かの子さんも土地名字ではないですか」

「若草は大したことあらへんよ。毎年燃えてるし」

「……関係あるんですか？」

大きな白蛇担任の話もそこそこに僕は地蔵バッグを肩にかけた。

「この後どっか行く？」

「弓道部と購買よらないと、清め塩切らしちゃったんだ。かの子は？」

「毎度よろしくあたしは帰ってから父さんの行進見に。今年はなんと、鹿島神が来られるのだ！」

「タケミカズチ様来るの！？ じゃあ絶対見に行かないと」

超多忙な武神様が来るなんて、五年に一度くらいじゃなかるうか。興奮してる僕らをよそに寂しそうな張子さんはぼつりと。

「わたしは今日住職さんが様子見に来るから……」

家から出られません、と続けた。

「神主さんもタケミカズ子様見たいだろうし、きっと向こうで会えるよ」

「ま、とりあえず帰りますかね」

かの子は蹄と術を器用に使ってランドセルを背負う。

張子さんもそれに倣って革のカバンを手を取った。

「じゃー多分またあとでねー」

「またあとで」

二人と別れてのんびりだんらり学内を歩く。

やっぱりかの子は鹿だけあって歩くのが速い。

ふらふら揺れながら日光を浴びながらがちょうどいいのだ。

重要文化財らしいふるーい記念館を横目に購買へ向かう。

清め塩を買っておいしい棒をもさもさ食べながら講堂の脇をとおつていざ弓道場。

誰もいなかった。

「あら……」

ゆっくり来たからもう鍵が開いていると思っていたのにアテが外れてしまった。

と、そこで思い出す。

ウチの弓道部はそこそこゆるくて、餓鬼注意報みたいなのが出るとお休みなのだ。

「うっかりしてたー」

少し悔しい思いをしながら踵を返す。

「どうした乾？」

「柳生さん」

二メートル以上ある弓袋を肩にかけ、腰まである烏の濡れ羽色した癖一つない髪をなびかせた少女がいた。

見かけ倒しという失礼だけど、そんなところのある張子さんとは対極をいく存在、柳生宗近さん。

「全日本女番長」「史上最強の女子高生」「柳生の至宝」など、彼女を指し示す言葉は多い。

切れ長の目は鋭く、僕より小さいのにそれを感じさせない輝きと、野暮ったいブレザーでも隠しきれない存在感を放っている。

天下五剣にあやかっつてつけられた名前の通り、優美さと鋭利さを併せ持ったすごい美少女。

でも、宗近は男性の名前だと思います。

勘違いしたおじいさんが先走って役場に駆け込んだとか。勘違いしていたはずなのに、出生届の続柄は長女となっていたらしい。

「鍵がかかっているのか？」

「そう、それに今日は餓鬼注意報出てるからお休みだよ。忘れてた」
「……そういえばそうだったな」

む、と眉を顰めた表情すらサマになる。

文武両道を地でいく彼女は、あの柳生家の末裔なのだ。

弓道部に所属している理由は知らない。

剣術一本の実家に対する反抗期なのかもしれない。

「とりあえず僕は帰るよ。柳生さんは？」

「……家で刀でも振ることにする」

「じゃ、バス停まで一緒だね」

僕が歩き出せば彼女も釣られて足を踏み出した。

特に会話もなくゆっくり道を往く。

元々僕はお喋りなほうじゃないし、彼女もきつとそうじゃない。だからなのか、会話のない空間でも変な気まずさはなかった。

桜の下を通り抜けて校門を出る。

ふと、守衛室の警察帽をかぶった鹿が目に入った。

同時にかの子の話を思い出す。

柳生さんも興味があるかもしれない、と話を振ってみることにした。

「柳生さん、今日の騎鹿隊見に行く？」

「いや、さして興味がないのでいかない」

「タケミカズチ様来るらしいよ？」

素っ気ない態度だった柳生さんの目の色が変わった。

「ホントか！？」

「うん、かの子の、若草のお父さん情報。騎鹿機動隊の副隊長さんなんだ」

「そうか、それなら絶対行かないと」

流石刀剣やら軍やらを司る神様、クールなあの子もイチコロだ。

タケミカズチ様は他の神様とは違い、普段から海上保安庁に海軍に国土交通省、皇居や鹿島神宮と春日大社に高天原と忙しく働か

れている。

春日大社と天界に通じる高天原がある奈良県民でも直接見ること
は滅多にない。

「でも往復するには時間もなしし荷物が……」

柳生さんは困った顔で弓袋に目をやる。

確かにかさばるし、コインロッカーに仕舞えるはずもない。

柳生さんの家はそのまんま柳生にあるらしい。

奈良市から柳生はバスで一時間近くかかるくらいには遠いうえ、
一時間に一本とかそんなレベルだ。

一度家に帰っていては間に合わないに違いない。

そこで僕は親切心から彼女を家に誘うことにした。

なんとたつて僕の家は近いし、たまには同級生を家に招くのもいい
だろう。

「なんなら僕の家置いてく？ 三条通も近いよ」

「……いいの？」

「いいよ」

「じゃあ、頼む」

すごく思い悩んだ末、彼女はコクンと頷いた。

普段はカッコいいという形容詞が似合う少女のそんな仕草は、例
えようもなく可愛らしい。

「柳生さんっていつもは凜としてるのに、たまにすごく可愛いよ

ね

「なッ!？」

思ったことをぼろっとこぼすと、柳生さんは俯いて黙ってしまっ

た。

そのまま二人して信号を渡ってアーケードを抜ける。朝方の餓鬼はお昼にはもう被われていた。

てくてくと古い街並みをしばらく行けば、改装して窓とかにほんのちよっぴり西洋テイストを取り入れた一軒家が飛び込んでくる。

表札は『乾』、これが僕の家だ。

鍵を差し込んで、物理的にも術的にも手ごたえがないことに気づく。

兄さん非番だったっけ。

そんなことを考えながらカラカラと引き戸を開いた。

「ただいまー。さ、入って」

「お、お邪魔します」

張子さんみたくおどおどしながら柳生さんは我が家にあがる。

でもきつちりローファアを揃えるあたりが違う。

弓が天井に突っかからないよう注意しながら、足音をたてずに彼女は階段をのぼる。

剣士というよりは忍者みたいだった。

「ここが僕の部屋、ちよつと汚いけどね」

「そんなことない」

彼女は弓を壁にたてかけて、本棚やベッドに視線を走らせた。きよろきよろと部屋を観察されるのはなんとも気恥ずかしい。

隅っこの埃とか目がつきませんように、と祈りながら制服を脱ぐ。椅子の背にひっかけてあったジーンズに足を通して、ぬいぐるみっぽい謎生物の描かれた黒いパーカーを羽織れば着替えは完了。

柳生さんかというと、興味深そうに漫画の背表紙を眺めている。

「お昼オムライスでいい？」

「え？」

「時間、もう正午だよ」

僕が指さしたシンプルな壁掛け時計は、長針と短針が重なり合っ
て少したったところだ。

「お昼まで世話になるわけには」

「いいよ。どうせ兄さんの分も作らなきゃいけないし」

「……では、お願いする」

「りょーかい。二十分くらいテレビ見るなり漫画読むなり気楽にし
てて」

遠慮が美德という日本人精神をこれでもかというくらい体現した
彼女のためにも美味しいオムライスを作ってやろうじゃないか、フ
フフ。

なんて内心ほくそ笑みながら、果たして友人を部屋に放置するの
はどうなんだろうとも思う。

一階のリビングに足を踏み入れると、新聞紙をアイマスク代わり
にして兄さんが横たわっていた。

非番の日はいつもこうだ。

無視して冷蔵庫と床下倉庫から食材をどさどさ出して机の上に並
べる。

さあ、レッツ・クッキング。

「くうっ、やるではないか。しかし第二第三の料理人がいつか……」
「何やってんだ？」

タマネギ相手に魔王様ごっこをやっていたら兄さんがのっそり起き上がった。きた。

軽く死にたい。

何事もなかったかのようにごまかそう。

「見りゃわかるでしょ。オムライス作ってるの」

「ほー、てか多くないか？」

「友達来てるから。兄さんの分を先に作るからそれ持って部屋に引っ込んでいて」

「へいへい」

ぼりぼりと黒い短髪をかきながら兄さんはソファーに戻り、新聞を広げた。

「あと、最近そんな魔王はいないらしいぞ」

「……っ」

ぼそつと言われるほうが大きなダメージを受けるみたいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187z/>

若草山三千桜

2011年12月12日00時50分発行